

審査の結果の要旨

氏名 ウォラル ジュリアン

本論は現代都市における公共空間ないし公共圏の特質を明らかにするために、20世紀の東京を取り上げ、鉄道が生み出す空間の性状を歴史的に分析したものである。

巨大都市東京において自動車はもちろん重要な交通手段であるが、むしろ網の目のように張り巡らされた鉄道、地下鉄などが都市の基盤を与えている。そこで著者は東京の鉄道に着目し、これを都市史的な文脈のなかに再定義することを提唱する。すなわち鉄道が形成する空間を、ネットワーク（第3章）、駅舎（第4章）、駅前広場（第5章）、車両内空間（第6章）の4つのスケールに分節し、これらが生み出す総合的な都市性を「Railway Urbanism」という概念で捉えることを試みる。

第1、2章では西洋における公共空間や都市に関する代表的な言説をレビューし、学説史的展望を述べる。第3章以降が本論に相当する部分で以下のような事実が明らかになった。

第3章は都市全体のスケールを扱ったもので、明治以降、現在に至るまでの鉄道システムおよびネットワークの形成過程を追跡したうえで、JR、私鉄、地下鉄の種別、公的機関と私企業の違いなどが、いかに東京の都市空間と密接な関係を有しているかが明らかにされる。

第4章では主要ターミナル駅が取り上げられる。新橋停車場、東京駅、万世橋駅、お茶の水駅、新宿駅の分析を通して、近代初期は国家的モニュメントとしての象徴的性格を有していた駅舎が、1920年代から30年代にかけてモダニズム思想を背景として社会基盤としての性格へと変容してゆくプロセスが指摘される。第二次世界大戦後、上記の潮流に消費的性格が加わることによって1960年代の新宿駅にみられるような複合施設が生み出されることになる。

第5章は駅前広場に関する歴史的考察である。日本の駅前広場は東京駅という例外を除くと、顕著な象徴性は認められず、むしろ駅前の小さな銅像や彫刻などの存在からわかるように、地元事業主、市民などの「ミドル・ダウン」が関与する、限定的な公共性を示している。ここでは銅像、彫刻などの建設経緯などが詳しく分析されている。

第6章は鉄道・地下鉄の車両空間に着目する。鉄道の登場間もないころの車両内での人々の振るまいを夏目漱石、田山花袋などの小説から再現し、見知らぬ他者との一時的共存が生み出す心理が抽出される。その後車両内はパブリックとプライベートの奇妙な共存関係を生み出すようになり、車内のマナー・ポスターや車内放送などの分析をトウして、「公共のなかのプライバシー」の独特のあり方が析出される。

最後の第7、8章は以上の議論を踏まえて、東京の鉄道基盤によって生み出された、日本独特の公共空間のありようが総合的に結論づけられている。

以上を要するに、本論は日本の近現代都市における公共空間ないし公共圏の特性を、「Railway Urbanism」という斬新な概念で捕捉し、その歴史的展開過程を丁寧に跡づけることに成功した。そして従来必ずしも明らかでなかった都市の公共空間の日本的特質の一端がこの研究を通して鮮明になったことは特筆に価する。一次資料を丁寧に収集・分析し、確かな根拠にもとづいた論理展開は実証性という観点からみても高い水準にある。学際的研究が進展している公共性概念に対して、建築学分野から重要な貢献をしたという点がとくに評価できる。よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。